

京大ブータン友好プログラム 第17次隊渡航からかいまみたブータン

竜野真維

京都大学大学院医学研究科 人間生態学（フィールド医学）

序文

今回のブータン訪問は、自分にとって二回目となる。昨年初めて渡航した際は、ブータンの医療・健康などに関する状況をさぐる目的で、医師として Trashigang 県の BHU（Basic Health Unit, いわゆる診療所）で勤務にあたらせていただいた。今回は医療分野の任務でなく、京大ブータン友好プログラム第17次隊の一員としての参加である。これは、1957年、ブータン第三代王妃来日に始まる交流が60周年を迎えたことを記念する事業の一環として、昨年京大を訪問された Sonam Dechan Wangchuck 王女への返礼としての側面もあり、同王女を総裁とする法学校がホストを下さっての旅程であった。退後は殆ど外交の場へおみえにならない第四代国王との面会も叶えてくださるとのこと。法学の知識もないブータンとの関わりも浅い自分が末席を汚すことには不安もあったが、幸いそれは杞憂に終わった。現地では暖かくおらかなホスピタリティで迎えていただき、これまで自分になかった視点を授かる貴重な経験となった。わたしは国王とお会いすることはできなかったが、ブータンを牽引する魅力的なリーダーたちと言葉を交わせたことは僥倖であり、彼らの姿に感銘を受け、多くを学ばせていただいた。この稿では、渡航のなかで自分が印象深く感じたことを中心に書かせていただきたい。

法学校視察

渡航の旅程は11月19日から24日、うちブータン滞在は3泊4日と限られた日程であり、出発までは旅というよりも仕事に行くような心持ちだった。しかしブータン上空に入って飛行機が高度を落とし、山の斜面のまばらな家屋から煙の立ち上るさまが目に入ると、一年経って忘れかけていたブータンへの郷愁が一気にこみあげてきた。

そして Paro の空港に降り立ち、ブータンの冷たく澄み渡った空気を吸ったときには、ああ、またブータンに戻ってこれることができて良かった、とすっかり嬉しくなっていた。

ブータン到着後、最初の行き先は新設の法学校だった。空港から Paro 市街を通り抜け、峠をすこし登ったところに、高台から谷を見下ろすようにして立派な建物がみえてくる。歴史的建造物かと思ってガイドに尋ねると、それが今回最初の目的地である法学校、Jigme Singye Wangchuck School of Law であるとのことだった。そこから山腹を一段のぼって車を降りると、並んで待っていた法学校関係者に迎えられ、ウッドデッキから校舎を眼下に望む、小さなティーハウスへと案内された（写真1）。見下ろすと、遠目には立派に見えた校舎が、まだ建設半ばの状態であることがわかった。

建設中とは知らず、普通の学校見学を予想していたので驚いた。しかし重ねて予想外のことに、これが非常に興味深いものだった。もし通り一遍の学校見学であったなら、これほどブータンらしさを感じ、彼らの考えや志を体感することはできなかったのではないかと思う。お茶をいただき簡単な説明を受けた後、学生のように若々しい建築技術者たちの案内で、まずは法学校の建設現場を一巡した（写真2）。校舎は、伝統的なゾン（城塞）を模した建築様式であるとのことだ。建築の工程、素材の由来や製造過程、彫刻の意匠に込めた意味、労働環境整備の取り組みなど、彼らが詳しく説明してくれた。建設現場を案内されたのには理由があって、建築の段階からチャレンジングな目標に取り組んでいることを見てもらいたいのだという。取り組んでいる課題はいくつかあるが、最も力が注がれていると感じたのは”Energy Efficient Design”というコンセプトだった。直訳すると「エ

エネルギー効率を考慮した設計」ということになるが、ここでは、伝統的な建築様式を基にしつつも、素材の軽量化や作業の機械化などで築造にかかる労力を省き、また建物自体の設計も、自然光利用や断熱材・通気路の工夫などによってエネルギーを節約できる構造にする、というようなことを行っているらしい。

Energy Efficient Design をはじめとする彼らの目標は、政府が推奨しているコンセプトからいくつかを選択したそうだが、近代化を進めながらも伝統文化や環境への配慮も重視するという発想はブータンらしいが、それ自体はさほど目新しいことでもないように思う。しかしここで感銘を受けたことは、彼らが、自分たちは政府の掲げた目標に従っているだけではなく、このスローガンを体現する良き先例として新境地を切り開こうとしているのだ、と述べたことであつた。目標の実現にむけて最善を尽くしてみることで、現実的には何がどこまで可能か、どのようにするのがよいかを検証し、後に続く事例の手本となり踏み台になろうという心意気で臨んでいるという。それは、海外からの視察にむけての大言壮語というわけでもなさそうで、実際、希望を胸に意欲的な姿勢で挑んでいるのであろうことは、彼らの表情や態度から感じて取れた。

若いスタッフは、ブータンの厳しい学歴社会と就職戦争を制したエリートたちだろうと思う。しかし彼らに傲慢さは感じられず、初々しさの残る真面目で純朴そうな好青年たちだった。彼らから感じられる気持ちの良さは、彼らの上に立つ人々とも共通するところがあるように思う。法学校学務長である Sangay Dorjee 氏、事務官 Phuntscho Wangmo 氏、建築責任者 Karma 氏、そしてこの後の旅程を通じてお会いすることになる他の要職の方々もみな、柔和で暖かい雰囲気をもつ聡明な人々だった。これは、ブータンの教養人に共通した特長であるように思う。わたしは今回のツアーを通して、このことが最も印象的だった。この視察で目にしたことは、多くの新しい課題に取り組もうとしているブータンのもつ、若々しい情熱をよく示していると思う。そして、それがこの事例に限ったことでないことも容易に想像できた。Sangay Dorjee 氏によると、ブータンの若者の中には海外留学をする者が多くあるが、その後は海外

に留まるのではなく、ブータンに戻ってきて活躍する者がかなり多いそうだ。彼らを見てみると、その理由のひとつは、能力ある若者が、若くして様々な事業の中心で主体的に力をつくせる環境があり、そうすることが国の未来を担う礎となることを、直接的に実感できる状況にあるからではないだろうか、と思った。ブータンという国は、今まさに伸びやかな成長の最中にあるのだということ、初日から強く印象づけられた。

法学校

今回の訪問は法学校との交流が主目的の一つであり、旅程のメインスケジュールとして法学校主催のシンポジウムがあつた。わたしが理解できたのは議論されていた内容のほんの断片に過ぎないと思うので、詳細については他稿にお願いし、ここでは感じたことをそのまま述べたいと思う。

ブータンの法制度はこれから整備していく段階にあつて、法学校もそのために試行錯誤しつつ、将来像を模索しているようだ。法学部の西谷教授とお話するなかで、「法律を作って事例に適用していくにあたり、それがきちんと機能するものにするためには、その地域の文化や価値観にそぐうものである必要がある。なお且つ、国際的な基準に照らし合わせても通用するものでなければならない。」ということを教えていただいた。

シンポジウムでの議論を聞いていても、いままさにこのことを模索しているのではないかと感じた。シンポジウムでのブータン側の演題は、ブータン人専門家から仏教思想に則る伝統的な価値観についてと、法律専門家として招かれた欧米人教員からの講演が半々であつた。前者はゾンカ語での講演であり、スライドに英訳が付記されていたものの、残念ながらわたしには深く理解できなかった。後者からは法学校のカリキュラムについて触れられ、授業の一環として学生たちが国内各地へ赴き、各地の村人からその地の慣習や事例についての聞き取り調査を行っていることや、それらを踏まえて将来の展望についての議論を重ねていることなどについて紹介された。古来・独自の文化や価値観を丁寧に拾って検証しつつ、外国人専門家の視点も交えて議論をすすめていくことで、双方の観点を尊重しつつ調和することのできる道を探しているのだろう。ローカルもグローバ

ルも大切にしながら進もうとする姿勢は、プータン社会そのものが目指す姿を反映しているようにも見える。初日にみた建築現場での挑戦と同じく、本質である法学校自体のありかたについても、彼らは進歩的な課題に挑み、意欲的に取り組もうとしていた。ここでも、彼らは求められたことをこなそうとだけするのではなく、新たな境地を切り開こうとする気概に満ちているのだということが感じられた。

首相との面会、王妃邸宅での晩餐会

プータンの新首相である Lotay Tshering 氏は、つい先日の選挙を制して首相に就任するまで、腕の良いことで有名な外科医だったそう。Lotay Tshering 氏と面識のある加藤さんの伝手で面会をお願いしたところ、多忙にもかかわらず暖かく迎えてくださった。Lotay Tshering 氏は、山極総長から国民総幸福量 GNH に因んで「あなたはいま幸福ですか」と尋ねられると、「いまはまだ何ともいえないが、任期中に成果を挙げることができたなら、幸福といえるだろう」とさりりと返し、その機知の片鱗を覗かせた。「医師であった頃は病気を診断し治療していたが、技術や手段は治療に必要なことの半分でしかなく、残り半分を占める重要なことは、患者を知ることだ。患者とそのバックグラウンドを知らなければ、患者を幸せにする治療はできない。法律の世界も同様で、対象となる人々についてよく知らなければ良い法はできない。我々の法学校はそれに取り組んでいる。世界的に見ても素晴らしい機関になるであろうことを確信している」と述べられた。彼はこれからプータンの中心となって国を導く人物である。首相就任からまだ数週も経たないが、将来の構想をもって各分野の中心人物と考えを共有されているのだろう。終始親しみやすい笑顔を絶やさぬ中に、溢れる才気を感じさせる人物だった。

首相官邸は、川を挟んで国王の執務室を擁する城塞 Tashichho Dzong に面し、窓からこれを目前に仰ぐことができる(写真3)。Lotay Tshering 氏は、執務室でも国王と常に向き合っているように感じられ、それがモチベーションを高めてくれるのだと仰った。首相にとっても、プータン王室は大きな存在のようである。

Lotay Tshering 氏を訪問した後、Sonam Dechan

Wangchuck 王女の母君である Dorji Wangmo Wangchuck 第四代王妃の宮殿において、王妃・王女、そして今回ホストをしてくださった法学関係の方々などと席を共に、豪華な晩餐会へ迎えていただいた。このときわたしは王妃と初めてお会いした。王女はしなやかで優美な方という印象だったが、王妃は気取りなく快活な雰囲気の方で、緊張しているわたしたちにも気さくに声をかけてくださり、全員を会話の輪の中へうながしてくださった。初日からホストとして様々なはからいをしてくださった法学校の Sangay Dorjee 氏、Phuntsho Wangmo 氏、法学校学長でもある裁判長 Tshering Wangchuk 氏、そして前回王女と共に来日された Chenchu Dorji 少将と裁判官である Tenzin 氏も共にテーブルを囲まれた。要人の方々は普段から王族とも親しくされているのか、豊富な知識で会話を弾ませ、時にはユーモアも交えつつ、和やかに会食を楽しんでおられる様子だった。王女が「わたしたちが美味しいと思うものを集めたのですよ」と勧めてくださったお料理は、モモ(ネパール風餃子)・ケワダツイ(ジャガイモのチーズ煮込み)・エジ(唐辛子とえ)など、伝統料理の代表メニューが取り揃えられ、いずれも美味なものばかりで、わたしたちも楽しい時間を過ごさせていただいた。

雑感

シンポジウムや会食など、たくさんの予定で充実した日程だったが、観光を楽しむ日もまる一日もうけられており、わたしたちは Punakha 県を訪れた。途中の Dochula 峠(標高約 3150 m)では往復ともに天候に恵まれ、行きは快晴の青空のもと、帰りは沈んだ夕陽の薄明かりの中、雲の彼方に白く連なる高峰を、端から端まできれいに見渡すことができた。非常に美しく神々しいその姿をみると、信仰の対象となったのも当然と頷ける。なかでも Masa Gong 峰は京大と縁深く、雲の間からその頂が覗くと、わたしたちはそれぞれの感慨を胸に歓声をあげた(写真4)。

Punakha は標高約 1200 m とプータンにしては低く、上着なしでも暖かく感じる陽気であった。日本の農村と見まがうような、美しい棚田に小川が流れる畦道を辿り、Khamsum Yulley Namgyal Chorten という寺院を訪れた。いまは稲刈りの季



写真1 ティーハウスと建設途中の法学校



写真2 法学校建築現場の見学風景



写真3 首相官邸の窓からタシチョゾン (Tashichho Dzong) を望む



写真4 快晴のドチュ・ラ (Dochula) 展望台で歓声が上がる



写真5 秋の棚田に咲く桜



写真6 朝のティンプー (Thimphu)

節のようだ。刈り入れの済んだ棚田で脱穀をする家族があり、その傍で桜が満開に咲いていた（写真5）。懐かしい日本の農村を彷彿とさせる風景だけに、稲刈りの時期に桜とは、日本の感覚からすると妙なものだ。小道を登って寺院に入ると、男女の交わりを模した歓喜仏が多数、ところ狭しと並べられていた。日本の寺とはかなり雰囲気異なり、参拝のしきたりも違う。仏教から歴史・文化に大きな影響を受けたこと自体は日本同様といえるかもしれないが、その表現型は聞けば聞くほどに色々と異なる。

日本とブータンは驚くほど似ている部分もたくさんあるが、そうかと思うと、対照的と思えるほどに違う部分もたくさんあることにまた驚く。まるで、生き別れて違う環境で育った兄弟のようだと思う。

仏教は、その智慧を受け継ごうとする長い月日の間に、時代や風土に適応して進化し、今日ではかなり違うかたちになって各地になじんでいる。社会全体も同様、その土地、時代、それぞれのあり方に適したかたちに変化しつづけている。大きな目で見れば、すべての事象は自然選択と適応の結果であり、生物の進化と同様、仏陀の掌の上で、自然の圧力の前にただ流されているだけなのかもしれない。しかし進化の過程で人類と類人猿が分かれたように、分岐の選択によって個々の未来は違うかもしれない。今回の訪問では、法の整備にむけての取り組みを通して、ブータンが進化しようとしている姿をみた。ブータンは、他国に学び、ある面は反面教師として、流されすぎず取り残されないう、賢明な舵取りをしているようにみえる。ブータンの発展を願うとともに、時代や文化を超えても仏陀の教えの根本が受け継がれてきたことと同様、ブータン社会がいかに変遷しようとして、彼らが守ろうとしている自国の文化や精神の真髄が受け継がれることを願いたい。単純な比較はできないが、日本がかつて外来文化に晒され激動を経験した頃の情勢と比べると、情報にも状況にも恵まれていて羨ましいような気もする。

今回は、ブータンの王室をはじめとして、首相、法学界の重要人物、将来有望な若者たちなど、選りすぐりの逸材ばかりと面会した。彼らの姿を通して想像すると、ブータンの明るい将来が目に見え

かぶような気がしてくるが、当然そう上手くいくことばかりではないだろう。それでも、聡明なリーダーたちの佇まいには、彼らがこれから幾多の困難を乗り越え、未来を切り開いていくだろうと信じさせる力があった。日本とブータンは共通点ばかりではないが、やはり何か似かよったところのあるわたしたちは、通じ合える部分も多いように思う。今後も、ブータンと日本、そして京都大学が互いに親交を深め、ともに学びあいながら成長していきたいと願う。

王女との雑談のなかで、日本からの帰国途中で美しい朝日を見たという話を伺った。その話で思い立って、最終日の早朝、日の出を見に行った。わたしはブータンの朝が好きだ。冷たく引き締まった空気、白く霞みがかかった日差しを受けて、すべての陰影が繊細に際立つ景色が美しい。Thimphu市街地の喧騒から離れ、ダルシン（経文の記された旗）の並ぶ山に登って一望すると、ここが重なり合う山々に囲まれた谷間にあるのだとよくわかる。下にいたときには気づかなかったが、街はうっすら雲に包まれていた（写真6）。空気の澄んだブータンで、遠い景色がいつも微かに白みがかって見えるのはなぜだろうかと不思議に思っていたのだが、雲の中にいたからなのかもしれない。この清々しい空気を忘れられず、帰国後もすぐまたブータンが恋しくなることだろう。

これまでの経験を振り返って

冒頭でも少し触れたが、わたしは昨年11月から今年の2月までの3ヶ月間、ブータン東部 Trashigang 県内にある2箇所の BHU、Johnkhar BHU と Bartsham BHU で、それぞれ1ヶ月半ずつ医師として勤務した。BHUでは医師として診察業務にあたり、日常診療の様子を体感した。同時に、わたしたちフィールド医学講座がブータン保健省とともに推進している高齢者ケア計画の実施状況も視察し、地域高齢者の健康状態と、彼らを取り巻く生活環境についてかいま見た。

大方想像される通りだと思うが、日本を基準とした目でみると、ブータンは医療の設備や物資が豊富ではない。首都 Thimphu にある国の基幹病院、Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital（通称 JDW）では、かなり高度な医療が可能になっ

ているらしいが、地方の診療所である BHU になると、日本の小さな個人医院や診療所でもできるような検査・治療もおぼつかない。BHU の規模にもよるが、心電図やレントゲンなどの基本的な診断機器がなかったり、常駐の医師がいなかったりするところもあるし、薬の在庫は必要最低限で、処置もけっこう無茶をする。

しかし、BHU というしくみ自体はよく考えられ、うまくできているとわたしは思う。規模はともかく、かなりの僻地にまで偏りなく配置され、医師がおらずとも最低限の対処ができるよう、各種のマニュアルが揃っている。改善を望みたい点もないではないが、3ヶ月間診療していて意外と困らず、大抵のことは何とかなった。帰国の前にねぎらってくれたブータン保健省の高官は、「わたしたちはむやみに高額な医療を導入するのではなく、限られた資源で適切な医療を行うことに尽力したい」と仰っていた。日本からブータンへの医療支援を考えると、技術や機器のレベルを高めて治療の可能性や選択肢を増やす、という方向性の発展を考えてしまいがちだと思う。もちろんその努力も重要ではあるが、いまある技術と資源の中で、最適な分配や選択ができるよう追求するというのも、非常に重要なことだ。ブータンの現状を踏まえると、後者の観点から地道に医療の均霑化をはかることこそ、多くの人々に求められているのではないだろうか。国の中枢にいながらにして、迷わずこちらへ重点を置くことができるのは、指導者として慧眼だと思う。

いっぽうで、現場の医師たちの多くに強い大病院志向・専門医志向のあることもまた事実である。Bartsham BHU で勤務した時、インターンを終えたばかりの若い医師が、BHU の責任者かつ唯一の医師として勤務していた。彼女は非常に優秀だった。年次のゆえに経験こそ浅いものの、知識も技術も日本の同年代の医師と遜色ないか、それ以上だと思う。国の指示で僻地の BHU に派遣された彼女は、はやく任期を満了したい、そして外国の高度な医療施設で研修し、専門医となって大病院で活躍したいと言っていた。若い医師が高度な医療施設で研鑽を積みたいたいというのはもっともで、また必要なことでもある。しかし病院人事のうわさを聞くと、中堅以上の実力をつけた医師た

ちも、多くが都市部の大病院での勤務を希望するのが実情のようだ。ブータンでは、「地方を知らなければ国を支えることができない」との理念のもとに、国立大学を全土に分散させている。せっかくそうした理念があるのに、優秀な医師がみな中央に流れ、地方に帰りがらないというのはさみしい気がする。たしかに医療の最先端で専門家として活躍することは医師としていわば花形であり、優秀な医師がそれを目指したくなるということは、同業者としてよくわかるのだが。しかも、BHU で勤務してみると、これが医師にとってやりがいのある仕事とは言いづらいついということも、正直なところわかる気はする。おおかたマニュアル通りの対処が求められ、あやしいと睨んでも一歩踏み込んで診断をつける機器がなく、使える薬はほぼ一択、少し症状が重いとすると基幹病院へ搬送することになる。前述した Bartsham BHU の若手医師は、BHU 勤務を疎かに考えてはいなかったと思うが、退屈はしていたと思う。実際、この枠の中で業務としてこなすだけなら単純作業に近く、医師としての成長を感じたり、充実感や達成感を得られたりする機会は少ないだろう。

しかし、ここにも創意工夫とチャレンジが許されるなら、中央で国家の大事業を率いることにも匹敵するほど、魅力ある仕事にもなりえるのではないかと思う。心電図・超音波など簡単な診療機器があれば嬉しいが、機器がなくとも問診や身体診察、医学知識など可能な限りに診療の質を高め、予防・啓蒙活動、社会的弱者の把握と支援など、Lotay Tshering 氏の言葉にもあったように、「医療を受ける対象となる人々をよく把握して」良質な医療の実現を目指すなら、地域でこそできる課題がいくつもあるだろう。今回の渡航でブータンの精鋭たちにみた氣勢にあふれる推進力を、これからは中央でばかりでなく、地方へも向けていくことが求められるのではないだろうか。

日本の医師偏在も未だ解決されぬなか、他国のことをいえたものではないが、日本も医療の発展の中で都市偏重となった反省から、地域医療に目をむけ発展させようとする活動が興った。ブータンでもいずれ始まるだろう。私事になるが、わたしは研修医だったとき、かなり僻地の診療所へ1ヶ月間の研修に行ったことがある。今でもとき

どき思い出す。ひたすら続く暗い林道の先に、湖のほとりで鶯の絶えまなく鳴き続ける、美しい過疎の村の診療所だった。機器がないのに驚くほど精度の高い丹念な診察、あたたかく心の通った患者との交流、そこでは、僻地医療のひとつの理想形を目のあたりにしたように思えた。その印象は今も強く残り、わたしは以来ずっと、地域医療に関わりたいと思いつけている。ブータンにも、まずはモデルケースとして、彼らが素晴らしいと思えるような地域医療をひとつ創ってみるのが良いのではないだろうか。今回みてきた法学界での挑戦と同様、ブータンらしく新しい境地を切り開けることだろう。もしそこで日本の経験が役に立つのであれば、喜んでお手伝いしたいと思う。

謝辞など

今回の渡航に際し、大学院の同期生である加藤さんとともに、ブータンと京大の交流60年のあゆみを纏めた写真本の作成に携わらせて頂いた。この企画は、京大ブータン友好プログラム発足の契機となった2010年の第四代国王謁見で、国王から「京都大学隊による、往時のブータンの様子を記録した写真を提供してほしい」とのリクエストを頂いたことにお応えしたものである。わたしは、京大とブータンとの交流に、ほんの最近加えてもらったばかりの新参者である。そんな自分には手に余る仕事だと気が重かったのが正直なところだが、多くの写真や資料に触れることができ、それらは非常に興味深かった。先人が地盤を固めた交流の歴史、そこから芽吹き、現在進行形で発展を続ける多彩な分野の活動について追ううちに、ブータンとの間に築かれた深い絆と、その背後にある多くの人々による膨大な尽力が、身に沁むように感じられた。学内外の諸先生方には、資料を提供していただいたり添削をお願いしたりと色々の無理をお願いしたにもかかわらず、快くご助力頂きほんとうに有り難かった。今回、山極総長・松沢名誉教授・坂本准教授の3名が第四代国王への謁見を許され、持参した写真本は無事国王のもとにお届けすることができた。力不足と時間切れのため、今回は暫定版ということで不十分・不正確な点が残ってしまったことが少々心残りではあるが、手に取っていただいた方から楽しんでいただけたとの知らせを聞いて、まずはそれが何

よりと嬉しく思っている。

写真集の編集にご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。最後にこの場を借りまして、深く感謝を申し上げます。

Summary

My Impression from the 17th Mission of Kyoto University and the Bhutan Friendship Program

Mai Tatsuno

Department of Field Medicine, Kyoto University Graduate School of Medicine

From November 19th to the 24th 2018, I visited Bhutan as a member of the 17th mission of Kyoto University Bhutan Friendship Program. Our first purpose was to see Her Royal Highness Princess Sonam Dechan Wangchuck, as a gesture of gratitude towards her visit to Kyoto University last year. HRH invited us to Jigme Singye Wangchuck School of Law where HRH is the Honorable President, and also organized an audience with His Majesty the Fourth King Jigme Singye Wangchuck. We also had the opportunity to meet the Prime Minister and key persons of the law school. This article presents my impressions which have remained with me since returning from this inspiring trip.